

令和8年5月15日(金)

未来への扉

高等特別支援学校 支援部 第183号



～「成長のあかし？反抗期とのつきあい方」～

支援部長

「最近、言い方がきつくなった」「親の言うことにすぐ反発する」「話しかけても『別に』『うるさい』と返される」——そんな姿に戸惑うことはありませんか。

小学校高学年頃から見られる反抗的な態度は、心が成長している過程の一つとも言われます。「自分で決めたい」「自分の考えを認めてほしい」という気持ちが強くなり、身近な大人にぶつけやすくなる時期です。

一方、高校生になると、反抗の形も少し変わります。

言葉で強く主張する、逆に無言になる、距離を置く、自分の世界に閉じこもるなど、表れ方はさまざまです。背景には、進路への不安、人間関係の悩み、将来への期待と戸惑いなど、複雑な思いが重なっていることもあります。

大切なのは、「反抗的な態度」だけを見るのではなく、その奥にある気持ちに目を向けることです。

例えば…

- ・ 頭ごなしに否定せず、まずは話を聞く
- ・ 感情的になったときは、少し時間を置く
- ・ できていることは、しっかり認める
- ・ 家庭でも学校でも、安心して話せる場所をつくる など…

反抗期は、親子にとってしんどい時期でもあります。子どもが「自分らしく大人になるための通り道」でもあります。

実は、私自身も小学校6年生の息子とのやりとりの中で、反抗期の難しさを日々感じています。

口調がきつくなったり、こちらの思いがまったく届かなかったり…。こちらも人間ですので、つい感情的になってしまうこともあります。

先日は腹が立ってしまい、5日ほどほとんど話をしないまま過ごしたことがありました。その間、小学校へ提出しなければならぬプリントがあったのですが、息子は自分で記入し、そのまま提出していたようです。担任の先生からの連絡で初めて分かりました。私に頼みにくかったのでしょうか。事情を説明し、後日あらためて提出し直しました。

「このまま、どうなるんだろう」と思っていたところ、最後には息子の方から、「どうしたらいいん？」と、話しかけてきました。

その一言に、「ぶつかりながらも、子どもなりに関係をつなごうとしているんだな」と感じました。反抗的に見える言葉や態度の奥にも、本当は「分かってほしい」「どうしていいか分からない」という気持ちが隠れているのかもしれません。

親も悩み、迷いながら、子どもと一緒に成長していく——。

そんな日々の積み重ねが、親子の関係を少しずつ育てていくのだと感じています。

私自身の子育ての経験も生かしながら、学校でも一人ひとりの思いに寄り添い、その成長を支えていきたいと考えています。ときには、子どもたちと保護者の思いをつなぐ“通訳者”のような存在になりながら、一緒に歩んでいければと思います。

作業療法士来校についてのお知らせ

昨年度からの取り組みとして、本校では職業実習の授業にて作業療法士の先生に各学年1回ずつ来校いただき、ご助言をいただきました。

本年度は2名の先生にご協力いただき、各学年2回ずつ来校していただく予定です。

また、手指機能や身体の使い方等に課題のある生徒については、対象生徒を検討したうえで個別指導も実施する予定です。

個別指導につきましては、実施回数に限りがあるため、希望制ではないことをあらかじめご了承ください。なお、指導の中で得られた助言や支援内容につきましては、担任よりお伝えいたしますので、ご家庭での様子とあわせてご確認ください。

【作業療法士とは】

- ・作業療法士は、日常生活に必要な動作(食事、衣服の着脱、筆記、道具の使用など)や、学習・作業に関わる体の使い方を支援する専門職です。
- ・一人ひとりの発達段階や特性に応じて、「できることを増やす」「やりやすくする」ための具体的な方法や環境調整について助言を行います。
- ・主に、病院やリハビリテーション施設、福祉施設、学校などで働いている専門職です。

【日程について】

- ・1年生 6月12日(金) 校内実習
- ・2年生 6月30日(火) 職業実習
- ・3年生 5月28日(木) 職業実習

